

今回は、吉村隆子先生にソルフェージュスクールの特徴についてお話を聞き、当スクールで普段自然に学んでいることのひとつひとつに歴史と理念が宿っていることを教えていただきました。また、スクール創立者の大村多喜子先生とともに音楽教育に心血を注いでこられた石田昌孝先生ご執筆の「私達のソルフェージュ教育」(1977年～89年発行の「ソルフェージュ音楽」に掲載)より一部を抜粋し、ご紹介します。当スクールの根本である「ソルフェージュ教育」がいかに音楽を深く理解する方法であるかを知っていただき、音楽を通じ子供たちの心に豊かな情緒や人間性を育みたいという理念を改めてお伝えする機会になれば幸いです。

また先生方の勉強会である「試演会」の報告もあります。普段のレッスンでは知ることのできない、先生同士の学び合う姿をご紹介します。

～ソルフェージュスクールのベースにあるもの～

お話：吉村隆子先生

Solfège という単語は一般的に「ソルフェージュ」と読まれることが多いですが、当スクール名が「ソルフェージュ」ではなく「ソルフェージュ」なのはなぜですか？

「ソルフェージュ」と「ソルフェージュ」の発音を比較したとき、普通「ジュ」を発音するときにはここに力が入り重くなります。「ジ」はそれよりも軽く発音されます。フランス語の発音では最後の「ジュ」あるいは「ジ」の所はひじょうに軽く無重量で空中に消えていく感じに発音されるので、「ソルフェージュ」のほうがフランス語の発音に近くなります。

かつて、ソルフェージュスクール創立者である大村多喜子先生が「ソルフェージュ」と発音したことを、フランスの著名なピアニストであり林紀子先生（ソルフェージュスクール創立当時からのメンバーであり、林さち子先生のお母様）の先生であった Robert Casadesus が褒めてくださったことがありとても嬉しかった、と聞いたことを覚えています。

※3階ホールへ上る階段の途中に、Robert Casadesus ご夫妻がソルフェージュスクールを訪問されたときの写真が飾ってあります。皆さん見たことがありますね！手前は左から、吉村順三先生（建築家で大村多喜子先生のご主人）大村多喜子先生、田中園子先生



ソルフェージュのレッスンでは#とbのついた音をオリジナルの読み方で習います。その理由を教えてください

ソルフェージュとは、もともとはそれぞれの音符をドレミを使って声に出して歌うこと（solfège の言葉の中に sol と fa が入っています）を指します。そのときにシャープやフラットのついた音をドシャープとかシフラットと読

むのでは間に合わないことがあるし、歌うのも大変です。そこで創立時の先生達はド、レ、ミにシャープやフラットがついている場合でも「単音節」になるように考え、シャープの付いた音はイで終わる呼び方（ファ → フィ、ソ → スィ）、フラットの付いた音はウで終わる呼び方（シーシュ、ミ → ム）を考えました。例外も少しありますが。これならたくさん「変化記号」が付いていてもスラスラと歌えます！

【ここで問題です！】これはなんの曲でしょう？

♪ミリミリミシレドラ♪（ヒント：リはレ#）

（答えは次ページの下に。最後まで読んで答え合わせをしてみましょう♪）

ソルフェージュスクール以外でも似たような読み方をしているところはあるようです。

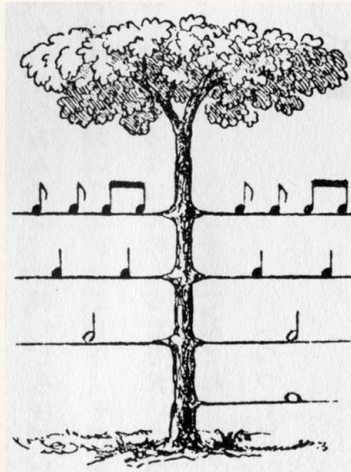
ソルフェージュスクールでは個人レッスンだけでなく、アンサンブルを大切に考えています

普通、器楽を学ぶときは基本的な技術のほかにはほとんどソロ（独奏）のための曲を学び、なかなかほかの人と一緒に（アンサンブル）合わせて楽しむ機会がありません。アンサンブルの楽しみを知らないなんてとてももったいないこと！ ソロの場合は自分が思うように弾いても問題は起こりませんが、ほかの人と一緒に弾く場合にはそれぞれが自分の思うように弾いたのではすぐに曲は先に進まなくなり頓挫し、バラバラになってしまいます。みんなが楽しく一緒に合わせるためには全員が同じ拍を感じて弾くことが必須です。そのところをソルフェージュスクールでしっかりと小さい頃から身につけておくと、意識せずとも自然と拍を感じて弾くので最初から自然にアンサンブルを楽しむことができます。ソロの曲以外に素晴らしい曲がそれはそれはたくさんあるので音楽を楽しめる世界が何十倍何百倍にも広がります！

まるちゃん (全音符)・しろちゃん (二分音符)
 くろちゃん (四分音符)・はねちゃん (八分音符)
 のネーミングはどのように考案されたのでしょうか

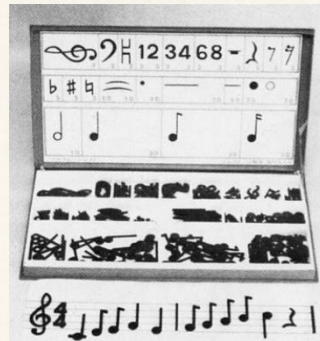
ソルフェージュスクールが創立時から用いている Marie Chassevant による SOLFÈGE DEL' ENFANT(1880 年出版)のお話の中に出てくる小鳥たちの呼び名を日本語に変えたものがまるちゃん、しろちゃん、くろちゃん、はねちゃんです。(フランス語では、Ronds, Blancs, Noire, Croche) この本は建築家 Antonin Raymond 夫人の Noemi さんが子供の頃ソルフェージュを学んだときに使った本で、ソルフェージュスクールの大事な宝です。(ソルフェージュスクールには SOLFÈGE DE L' ENFANT II からしかななくて初めのお話書かれている I はどこに行っちゃったのでしょうか?) いろいろと調べたら、Marie Chassevant は教育者としてアメリカでもドイツでもよく知られている人だということがわかりました。

また、検索画像でソルフェージュのオリジナル(?)も出てきました! 私たちが使っている赤い箱のソルフェージュ(この名前はわれわれ独自のもの)ととても良く似ているのでびっくりしました。というのは、私たちのソルフェージュは Mrs. Raymond が記憶を辿り伝えてくださったのを吉村順三先生がデザインして作ったもので、今回検索で出てきた画像のことは全く知らなかったのです! まだインターネットなどはなかった 1960 年代の話です。連想ゲームがとてもうまくいったケース?



ソルフェージュスクールができる前、きっと大村先生は音楽の基礎を教える学校についての考えや希望を音楽に造形の深い Mrs. Raymond に話したのでしょうか。そうしたら Mrs. Raymond は自分が子供のころに受けた Marie Chassevant の教育についてご本(その後

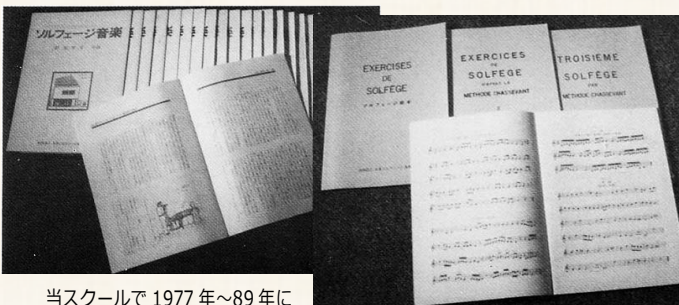
アメリカに移住、そして日本に来られるときもずっと持っておられたことがまた奇跡的!)を示し話してくださったのです。そして、ご自分が小さいときに使った教本をくださり、ソルフェージュの誕生のもととなる記憶を辿ってのお話もしてくださったのです。それはソルフェージュスクールの創立に関わった林紀子先生や石田昌孝先生(石田先生については次ページにて後述します)も子供たちが楽しく自然に音符や読譜のための基礎を教えるのにとっても良いメソッドだということで、さっそくに「音楽のおばさんのお話」を小さな子供向けに使い、現在使われている Chassevant I, II, III の教本も独自に編纂、印刷して使用することにしました。Mrs. Raymond が小さいときに受けた音楽の授業をずっと覚えていて教本も大事に保管しておられたということはそれがよっぽど記憶の中で強く残っていたのでしょうか。それをソルフェージュスクールが受け継ぎ今でも生き生きと伝えられているのです。



↑ソルフェージュのオリジナル(?) と ↑私たちが使っているソルフェージュ 本当によく似ていますね!

Marie Chassevant マリー・シャセバン 略歴
 1836.8.31 (Alençon, Basse-Normandie)
 - 1914.2.22 (ジュネーブ)
 父は数学者。ピアニスト、歌手。パリに於いて音楽教育に目覚め、Marie Pape-Carpentier と Friedrich Froebel の著書から影響を受ける。1895-1912 ジュネーブ音楽院で子供にソルフェージュを教える。そのメソッドはスイス、その他のヨーロッパで高く評価され多くの音楽教師を輩出。簡単な絵や特別仕立ての鍵盤を用いて遊び心のある方法を提供した。そのメソッドは 1970 年代まで使われた。

そのメソッドは 1970 年代まで使われた。…とありますが、ソルフェージュスクールでは今も健在ですね!



当スクールで 1977 年~89 年に発行していた「ソルフェージュ音楽」

現在もスクールで使用しているソルフェージュ教本

「ソルフェージュ」の音楽教育

石田昌孝先生の言葉

～「私達のソルフェージュ教育」に紡がれる想い～

「私達のソルフェージュ教育 (1)」

明治の初期に洋楽が紹介されてから、ほぼ百年が過ぎました。最近では、音楽は私共の生活の中に広くゆきわたって盛んになり、それにつれて、音楽教育もまた盛んで、音楽を学ぶ人も非常に多くなりました。これは、私共音楽を愛好し、それを人々の精神の糧、心のよりどころとしたいと願う者としては、たいへん喜ばしいことです。

しかし、音楽の専門大学から、あちこちに見かける音楽教室に至るまで、その目的は、演奏家を養成することにあるように思われます。そこでは、生徒は一音一音先生から教え込まれて、その指導通りに楽器が弾けるようになるまで練習を繰り返し、手や指がいわば自動的に動くところまで訓練するということが行われてきました。これが洋楽が導入されて以来行われてきた音楽教育の形であり、それは今も大筋では変わっていません。けれども、こうやって音楽を学んだ人が、すべて演奏家になれるわけではありません。そして、演奏家になれなかった大多数の人にとって、この様な学び方のために、音楽は教養ともならず、精神の糧ともならず、かえって音楽を自分のものとするのを妨げられているのも珍しいことではありません。一方、演奏家になった人についても、演奏を効果的にする表面的技術には優れても、音楽の本質を理解した演奏は期待できません。又このような演奏は、聴く人に心のよりどころ、精神の糧となる音楽を与えることが、果たしてできるでしょうか？

見たところ非常に盛んな音楽や音楽教育のこのような有様は、私共の願うところから遠いところにあるといわざるを得ません。この様な状況は、音楽教育の中で、音楽そのものを身につける教育が行なわれなかったためだと思えます。

音楽を本当に身につけるためには、先ず、音を識別する能力を育てると共に、楽譜を見



1961年「ソルフェージュ教室」開校当時、山脇服飾美術学院（当時）の教室で教えておられる石田先生の写真

て楽器等の助けをかりずに正しく歌うことや、音楽を聞いてそれを楽譜に書く事を学ばなければなりません。これらのことが、「ソルフェージュ」の第一歩となるのです。

さて、この「ソルフェージュ」とは何でしょうか。音楽教育が盛んになると共に、近頃では、「ソルフェージュ」も教えることが風潮となってきました。しかし、これも又、その大半は、はっきりとした目標や、教育上の理念などはなしに、漠然と行なわれているに過ぎないように見受けられます。これは、多分実際にソルフェージュを教える先生方が、その本来の意味をまだ十分に理解していないからではないでしょうか。

「ソルフェージュ」はフランス、イタリアなどの国で数百年間にわたって行なわれてきた音楽の基礎教育のことです。ごくはじめは読譜力の養成を目標としましたが、今ではその内容は拡張されて、広く音楽の基礎的能力を身につけると共に、音楽的幻想力を養い、創造的な活動を導き出すものと考えられています。その基本的なところは次のようなことです。

楽譜を読んだ時、それを音楽として心の中に聞き取ることができ、音楽を聞いた時、その音楽を楽譜として思い浮べることができ、更に、音楽を聞いたり、楽譜を読んだりした時、楽句の間の音楽的関係がすぐ理解できることです。

「ソルフェージュ」の内容は以上のようなものですが、『ソルフェージュを知らない歌手や奏者は、フランス語の意味を知らず、その発音だけを覚えて、ラシーヌを演じようという外国人の俳優にもたとえられる。』と言われています。この話からもわかるように、ソルフェージュは演奏などに先立つ、音楽そのものの問題です。このソルフェージュの基礎の上に、他のさまざまな技術があつて、よい演奏、よい創造ができるのであります。また単に音楽を鑑賞するためであっても、ソルフェージュの基礎を持つ人と持たぬ人とは、大きな違いが出てくるでしょう。

音楽は、音を素材としているわけですから、ソルフェージュの訓練のためにも、感覚の鋭い幼児のうちに、その教育を始めるのが、効果的でもあり、大切なことです。

さて、ソルフェージュの第一歩は、先に述べたように、音を識別する力を養い、正しく歌うことや、音楽を楽譜に書取ることですが、

ソルフェージュスクール創立メンバーの一人であった石田昌孝先生。穏やかで優しいお人柄が印象的でした。当スクールで1977年～89年にかけて発行していた冊子「ソルフェージュ音楽」で、石田先生は「私達のソルフェージュ教育」という連載を執筆されており、今回から不定期でその貴重な資料を再掲載する予定です。ぜひお読みください。初回の今回は、1977年11月創刊号から引用します。

石田昌孝先生

北海道小樽市出身。お母様の影響でピアノを習い始める。北海道大学理学部卒業後、同大学教育学部音楽科に再入学し音楽を学ぶ。

その後、東京で大村多喜子先生と出会い、ソルフェージュスクールの設立に参加。

「音楽が、言葉と同じように、全体の文脈の中で何を言っているかを理解する助けとなるもの」がソルフェージュで、ひいては楽曲分析にまで達するのだ、という考えのもと、ソルフェージュスクールで50年に渡りソルフェージュとピアノの指導に当たる傍ら、昭和音大短大ピアノ科の教授も勤める。

2012年3月逝去。



石田先生（左）と大村先生（右）
2011年11月創立50周年記念演奏会にて

その際、特に注意しなければならないことがあります。それは、ソルフェージュを学ぶ者が、模倣に頼るなどして、受動的に学ぶのではなく、子供自身が積極的に、音楽を学び、把握するようにしむけることです。これは非常に微妙なところですが、表面的には、同じようなソルフェージュ教育でありながら、その成果は根本的に違うものになるのです。

更に、歌う時には、その音楽の持つ拍子の基本の拍を打ちながら歌うことが、特に大切なことです。細かい説明はとて一口には言えない事なので、別の機会にゆずりますが、この過程から身につけられるものが、音楽を学ぶ上の最も基本であり、これが、音楽を人間の精神と結びつけ、又音楽が教養となり、人間形成に役立つものとなるためにも、欠くことができぬものであると考えます。

このような理念を実際に教育の場で行なうには、現実即した、さまざまな、具体的な工夫が必要になりますが、私共は長い間の実践によって、それを積み重ね、私共の考えを、現実の中で確かめて参りました。

勿論、ソルフェージュは音楽のすべてではなく、その基礎ですが、その上に作曲や、演奏の勉強を積上げていくことによって、はじめて立派な音楽家が誕生するのです。又専門家にならない人も、この基礎を身につけると、音楽を一生心の宝にすることができ、こういう高い音楽的教養を持った良識ある聴衆、鑑賞者が大勢居ることも、我が国の音楽文化の発展のために、大切なことです。

(1977年11月創刊号より)

先生方による試演会

2020年3月1日(日)

ソルフェージュスクールでは年に一度、先生方が曲を持ち寄り意見を交わす試演会が行われます。今回は、普段触れる機会の少ないロシアの小曲をご用意くださった林さち子先生に感想をいただきました。

3月1日、暖かな春の日差しが心地よい日曜日の午後、先生たちの内輪の会「試演会」が、有志による参加で行われました。

この会は、演奏を聴いて曲について論じたり、感想を述べたりする勉強会です。参加者7人、演奏者4人(ソロとトリオ)の短いプログラムでしたが、活発な意見交換がなされ、有意義なひとときでした。

一人の先生からこんな感想をいただきました。「とても穏やかな良い時間で、音楽はいいなあ、あらためて感じました！」

新型コロナ禍で社会活動が制限され、先の見えない不安がある中、スクールの皆様は毎日どのようにお過ごしですか?こんなときこそ楽器を弾いたり美しい音楽を聴いて、心ゆくまで音楽に親しんでみませんか!このような状況だからこそ深く心の奥底に響いて、感動と勇気をもたらす音楽の世界に出会えるかもしれません。



《プログラム》

ノクターン「告別」 グリンカ
小組曲より「修道院にて」
「セレナーデ」 ボロディン (Pf 林さち子)
組曲 ミヨー
(Cl 古沢裕治、Vn 妹尾美紀子、Pf 加藤恵理)

2019年度 皆勤賞&精勤賞

皆勤賞 6名・精勤賞 7名

みんな
頑張りました!

パ
ウ
ゼ

ソルフェージュスクール YouTube 動画配信中!

生徒の皆さんやいろいろな人たちに、おうちでも音楽を楽しんでもらえるように、先生たちが楽しい動画を作りました!4月5日から配信されています。「おながくのおばさんのおはなし」や、江原陽子先生の素敵な歌を聴くことができます♪ぜひ観てくださいね。

<https://youtu.be/lvXDF-QRExE>

また、ウフクラスの千馬光純(せんばありす)ちゃんがさっそく動画を観てくれた様子を、お写真に撮って送っていただきました!陽子先生と同じ動きで手を振ってくれて、先生もとても喜んでいましたよ♪



みんな
げんきかな♪

ようこそんせい~♪

【今後の予定】

6月に予定されていたソルフェージュスクール演奏会は、新型コロナウイルス感染拡大防止に伴う休校で練習ができないため、通常プログラムは中止といたします。

7月以降開催予定の

- ・楽しくアンサンブル
- ・夏季合宿

なども含め、今後の変更や開催可否につきましては、随時ホームページやFacebookなどでお知らせしてまいります。

〈編集後記〉

このたびは新型コロナウイルスの影響により3月から休校、また「おさらい会」「春のミュージックキャンプ」も休止せざるをえず、残念な春となってしまいました。普段と違う生活環境のなか、多くの方が不安な日々を過ごしていることと思います。講師陣やスタッフも、生徒の皆さんにお会いできずとても寂しい気持ちでいます。しかし、このような時こそ、音楽が私たちに寄り添い心を温めてくれる友であることも改めて感じます。

みなさんと一緒に音楽ができる日が一日も早く来ることを心から願っています♪

↓スクールの情報はこちら↓

Facebook

Web

